

関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料III

琴秉洞編・解説

朝鮮人虐殺に関する知識人の反応

◆ 全2巻

日本の知識層が朝鮮人虐殺問題に対し、
どう反応し、どうとらえていたのか、

当時の雑誌・新聞・単行本・官報・文書等に

掲載された見聞記、体験記、日記、評論等を

体系的に収録し検証する。収録した知識人は三六〇名。

緑蔭書房

鮮人騒ぎの調査

布施辰治

(1) 殺害せられた鮮人の數幾干 (2) 殺害せられた

域に残存するもの、數とを除いた數が(1)悉く殺害せられたものか(2)災死したか或は真に行衛不明に爲つて居るものかの問題數に屬するのであるが、私共の調査した處では、變災區域に在留した變災當時の鮮人數は、少くも二萬を下らないらしい。而して、變災後或は歸國し、或は在留して、其の所在の判かつて居るものが、多く

144 大震雜記 (抄録) 芥川龍之介

—— (略) ——

僕は善良なる市民である。しかし僕の所見によれば、菊池寛はこの資格に乏しい。

戒嚴令の布かれた後、僕は巻煙草を啣へたまま、菊池と雑談を交換してゐた。尤も雑談とは云ふものの、地震以外の話の出た訣ではない。その内に僕は大火の原因は○○○○○○○○さうだと云つた。すると菊池は眉を挙げながら、「嘘だよ、君」と一喝した。僕は勿論さう云はれて見れば、「嘘だらう」と云ふ外はなかつた。しかし次手にもう一度、何でも○○○○○○はボルシェヴィキの手先ださうだと云つた。菊池は今度も眉を挙げると、「嘘さ君、そんなことは」と叱りつけた。僕は又「へええ、それも嘘か」と忽ち自説(?)を撤回した。

再び僕の所見によれば、善良なる市民と云ふものはボルシェヴィツキと○○○○との陰謀の存在を信ずるものである。もし万一倍じられぬ場合は、少くとも信じてゐるらしい顔つきを装はねばならぬものである。けれども野蛮なる菊池寛は信じもしなければ信じる真似もしない。これは完全に善良なる市民の資格を放棄したと見るべきである。善良なる市民たると同時に勇敢なる自警団の一員たる僕は菊池の爲に惜まざるを得ない。

尤も善良なる市民になることは、—— 兎に角苦心を要するものである。

145 大震日録 (抄録) 芥川龍之介

九月二日。

東京の天、未だ煙に蔽はれ、灰燼の時に前庭に墜つ月堂に請ひ、牛込、芝等の親戚を見舞はしむ。東京又横浜並びに湘南地方全滅の報あり。鎌倉に止まれ心類りに安からず。薄暮円月堂の帰り報ずるを聞けば芝は焦土と化せりと云ふ。姉の家、弟の家、共に全焼ん。彼等の生死だに明らかならざるを憂ふ。

この日、避難民の田端を経て飛鳥山に向ふもの、陸ず。田端も亦延焼せんことを恐れ、妻は児等の衣をバめ、僕は漱石先生の書一軸を風呂敷に包む。家具家財なすも、運び難からんことを察すればなり。人慾素とは云へ、存外又あきらめることも容易なるが如し。熱三十九度。時に○○○○○○あり。僕は頭重さず。円月堂、僕の代りに徹宵警戒の任に当る。脇差を提げたる状、彼自身宛然たる○○○○なり。

—— (略) ——

【女性】 1923(大正12)年10月

内容見本

昨秋の變災中に於ける鮮人殺害問題は、激震劫火、海嘯の襲來に惨死した、自然の罹災者よりも、人爲の兇刃に斃された製糖であつた丈け眞に私の心を傷ましめた悲惨事の中の一悲惨事である。

夫れ故、私共の自由法曹團では、九月二十日第一回の變災善後策總會で「變災中に於ける鮮人殺害の真相及其の責任に關する件」の調査を附議し、若々其の調査を進めたのであるが、どうしたものか當局官憲では、私共に調査の便宜を與へないばかりか、却つて、之れを妨害して居る如うな感があるので、確定的事實の調査を發表する程度に至つて居らない。従つて、私は今こゝに所謂鮮人殺害問題の真相を「斯ふ」と定めて發表する事は出来ないが、當時官憲當局の發表した所謂鮮人殺害問題の顛末は、あまりに杜撰で又あまりに卑怯な發表振りである事は、之れを斷言し得る、故に私共の調査方針として居

阪神・淡路大震災から一周年を迎えた。関東大震災以来の未曾有の激震と被害から立ち上りつつあるが完全復興までは未だ前途多難である。震災当初にみられた国民の関心も急速に薄れつつある。まして七〇年以上も前の関東大震災の実態・体験の継承は、送り手の高齢化や歴史教育の後退とともに一層の風化が進みつつある。同時に大震災下で荒れ狂った、六千人以上ともいわれる朝鮮人大虐殺事件も過去のものとなりつつある。その事実すら知らない世代が確実に増えている。しかし歴史的現実から目をそらすことは、われわれがかかえる現代社会の諸問題から目をそらすことと同じである。とりわけ、今日の国際関係の中で生じる日本批判・軋轢は、近代日本の対外政策・侵略と無関係ではない。

関東大震災における朝鮮人虐殺は、日本人のその後の朝鮮人蔑視・憎悪に拍車をかけ、ひいては他民族蔑視を深める契機ともなり、ついにはアジア侵略戦争と他民族虐殺に日本民衆を引き入れる序曲をなした。そしてその後の歴史が示すように権力側からめとられた「民衆」は敗戦までファシズムと侵略戦争へと動員されつづけた。こうした誤ちを繰り返さないためにもその画期をなした関東大震災下朝鮮人虐殺事件の検証を続けていくことが不可欠であろう。

今回本史料集に集大成された、当時の日本の諸分野のオピニオンリーダーとしての知識層の関東大震災、朝鮮人虐殺問題に対する見方や姿勢を検証することとは、近代日本人の朝鮮人観・朝鮮観の形成を知る上でも不可欠の作業である。同時に各分野・各個人の史料としても人物史・作家研究の貴重な情報源をなすものである。

一九九六年二月

緑蔭書房

本資料の特色

▼日本知識人の震災に対する反応、朝鮮人虐殺に対する反応を体系的に把握することができるようになつた。

▼主として震災直後に書かれたものを選択、収録したが、戦前に書かれ戦後発表されたもの等の中からも補足した。

▼収録した知識人は360名、総件数323件。各分野毎の知識人の人物数・件数は

- 戦前篇
- 一 官僚・軍人——19名(14件)
 - 二 政治家・実業家——16名(13件)
 - 三 ジャーナリスト・評論家・思想家——27名(48件)
 - 四 学者・研究者——17名(23件)
 - 五 教育関係者——2名(2件)
 - 六 宗教関係者——6名(11件)
 - 七 法曹関係者——20名(5件)
 - 八 労働・社会運動家——26名(13件)
 - 九 旧制一高生・その他——12名(2件)
 - 十 甘粕事件の感想——38名(5件)
 - 十一 文学者——121名(128)
- 戦後篇
- 56名(59件)

▼第一巻には戦前篇Ⅰ(一・官僚・軍人)十・甘粕事件の感想)を収録、第二巻には戦前篇Ⅱ(十一・文学関係者)及び戦後篇を収録した。

▼史料中、原本の状況がよくないもの及び戦後篇は原則として、新たに活字に組んだ。

▼単行本、雑誌、新聞、官報、文書等より、見聞記、体験記、感想、ルポ、論説、評論、小説、エッセイ、戯曲、詩、伝記、日記、議事速記録を収録した。

▼当時の日本知識層の朝鮮観・朝鮮人観の傾向と特徴を知る上でも必須の資料。

刊行に寄せて

大震災当時、主として関東地方に居住していた日本民衆は突然の大震災と大火災に度を失い、為政者、軍・警当局の朝鮮人暴動、放火、投毒説、などの「流言」を一も二もなく信じ、その大多数は朝鮮人虐殺、朝鮮人狩りに狂奔したのが事実である。

しかし、一定の教養と積み重ねられた経験があり、事物に対する客観的判斷も的確に示せる筈の高名な知識人といわれる人の発言、もしくは無発言は、虐殺されている対象が、主として朝鮮人という侵略により植民地化された民族という点で、その反応や無反応はその人物の思想性や人間性の是非を問うものになつていると言つても過言にはならないと思う。

関東大震災は日本の歴史上の大地震に較べても被害の甚大さは特出してゐるので、体験記や目撃記、伝聞記録の多さは他の地震記録の追隨を許さないものがある。しかしながら、関東大震災は被害の大きさだけが特出してゐるだけでなく、人為的な殺人、少数の日本人社会主義者や中国人（朝鮮人と間違われ）に対する虐殺と、殊に朝鮮人に対する大虐殺という事実を含んでいると言つてとて、それまでの大地震災害と峻別されるものである。この時の朝鮮人虐殺は一般日本人の対朝鮮認識だけでなく、対アジア民族認識に決定的と言へる影響を与え、アジア侵略戦争時の大量虐殺につながつてゆく。

今、ここで問題にしようとしているのは、一般国民に大きな思想的影響を与えるところの知識人・文化人の朝鮮人虐殺と関連する文章及び言動である。

そのほとんどは、当時の新聞や雑誌、または日記、自伝などに体験記、伝聞記録として残されているもので、後には単行本・全集や総合的な震災記録（官

・公・私）等に収められている。

町内の警察だと云つて来い
金巾の切つはしを懸けて来た。
と、聞もなく先制の赤い
のは通運運の色だから所差し
てくれと云つて黄色い布切れ
を持つて来た……
金重葉は山と、川といふこ
とに標めたなどとは花野の知
識がそつくりそのまゝ引用さ
れたかと思ふ……



収録した知識人・文化人

水野錬太郎 後藤文夫 松井茂 正力松太郎 宇垣
一成 小川平吉 永井柳太郎 後藤新平 山本権兵
衛 波沢栄一 増田義一 石橋湛山 羽仁説子 長
谷川如是閑 土田杏村 水野広徳 宮武外骨 三宅
雪嶺 千葉亀雄 茅原華山 吉野作造 和辻哲郎
上田貞次郎 森戸辰男 寺田寅彦 沢柳政太郎 植
村正久 内村鑑三 柏木義田 賀川豊彦 山室軍平
布施辰治 高木益太郎 山崎今朝弥 内田良平 鈴
木文治 青野季吉 秋田雨雀 芥川龍之介 生田長
江 内田魯庵 生方敏郎 江口渙 小川未明 折口
信夫 金子光晴 川端康成 菊地寛 幸田露伴 斉
藤茂吉 佐佐木信綱 志賀直哉 竹久夢二 谷崎潤
一郎 田山花袋 壺井繁治 坪内逍遙 徳富蘆花
永井荷風 新居格 野口雨情 萩原朔太郎 堀口大
学 宮沢賢治 武者小路実篤 室井犀星 山本有三
与謝野晶子 吉屋信子 若山牧水 島崎藤村 高群
逸枝 高見順 清水幾太郎 大山郁夫 平林たい子

大震災時の朝鮮人問題に触れても、書き手の問題意識、政治的、階級的立場、思想の違いなどからくる表現上の濃淡や微妙なニュアンスの差異の生れることは止むを得ぬことだが、その時の書き手の朝鮮人観・朝鮮観は間違いなく伝ってくるようである。

琴秉洞(朝鮮大学校講師)

第2巻収録の「解説」より

言及して「吾人が日本人に対する以上に朝鮮人に同情す」と言い切ったのは流石と云うべきか。

史料237の萩原朔太郎の「近日所感」は、「現代」大正一三年二月号の「近作一什」という、詩人、歌人、俳人一九人の作を集めた項の欄に載ったものである。私は朔太郎は高村光太郎とならぶ高名の詩人という位の認識しかなく、彼の詩集も「月に吠える」というのがあつたなあ、と忝かに覚えていた程度で、勿論、中身はろくに読んでいない。しかし、この「朝鮮人あまた殺され云々」の「近日所感」を眼にした時、私はほとんど雷に打たれたかようであつた。このような詩を雑誌に発表した人がいた、というのが先づ大きな驚きであつた。萩原朔太郎という詩人が日本の詩の世界でどんな評価を受けているのか、どんな立派なものか、または拙い詩を書いているか、後にとんない良いこと、悪いことをした人物なのかは問う所でない、という実に主観的な、衝動的な非理性的極まる想念に頭が満たされたものである。

この詩こそ、大震災時の朝鮮人虐殺と関連した良心的日本知識人の至高の意志表現であろう。この詩を書いたときの朔太郎の思想と感情の純粋さと高さを、他の日本知識人の積極的肯定型、消極的肯定型、大勢順応型の文、言と比較してもらいたい。朔太郎のこの詩の前では、文だけでなく人間そのものが忽ち色褪せてゆくのが判るだろう。この史料集の各中罪裏にこの詩をおいた所以である。

史料238は評論家、翻訳家の馬場孤蝶の大震災記である。急進的な自由民権運動家であつた兄、辰猪の影響もあつた孤蝶は後に社会主義、無政府主義にも理解を示すように、幅の広さを見せる。が、この時は所謂「主義者」ではない。彼は「大震災時の朝鮮人による、投弾、投毒、放火、襲来流言を聞いて、「そのまま受け容れることが出来なかつた」と書いて

ている。この種の悪質なデマを信する信じないに何も特別な進歩的思想は要しない、只、まともな良識さえあれば済むことだ、ということこそ馬場孤蝶は示していないだろうか。

史料239の人見東明は詩人である。早大卒後、三木露風、野口雨情らと早稲田詩社を設立したり、秋雨雨雀らと雑誌を出したりしている。人見は大震災後間もなく『東京』という単行本を出した。ここに収録した文は、この本より抜いたものである。彼は朝鮮人暴動流言を聞いて、その虚言なるを見破っている。彼は家族にだけは、そのことを説いたという。「私は丁度始めて衆愚と云ふ者の存在を明らかに見」た、と書いているが、同時に「その力の恐ろしさも知りた」という。

史料240は作家藤森成吉が、大震災一年後に発表した小説である。正義感に燃える青年将校が軍隊内部の不条理と、支配層の排外主義思想に毒された民衆により生命の危険を体験するという話である。結論にやや性急さが見えるようだが、作者の社会を見る目は曇っていない。

尚、旧被服廠跡の横網町公園内の慰霊堂横には、戦後建てられた藤森成吉筆になる「この歴史永遠に忘れず在日朝鮮人と固く手を握り日朝鮮善アジア平和を打ちたてん」という慰霊の石碑があつて、浅からぬ因縁を物語っているようである。

史料241の細田民樹は軍隊時代を材にとつて優れた軍批判の小説を書き、名を挙げ、後にプロレタリア文学運動に投ずることになるが、大震災時の体験を誌したこの「運命の醜」は丁度その中間点に当たるであろう。朝鮮人迫害問題に鋭く反応したものでないにしろ、流言の背後に「現在の人心傾向」があることを見ているのは、よい意味で時代に敏感な作家であることを感しさせる。

史料242の詩人堀口大学にこの「地震」以外に大震災に関する詩文の有

神近市子 佐多稲子 山川菊栄 秋山清 井伏鱒二
尾崎一雄 他 278名

朝鮮人あまた殺され
その血百里の間に連なれり
われ怒りて視る、何の慘虐ぞ

近日所感 萩原 朔太郎

採録した雑誌・新聞・単行本

- ▼雑誌・機関誌——自警、実業の日本、雄弁、婦人之友、太陽、中央公論、朝鮮及満洲、日本及日本人、東洋経済新報、我等、我観、改造、思想、女性改造、婦人画報、婦人公論、外交時報、教育時論、帝國教育、聖書の研究、上毛教界月報、進め、文化運動、新興、文章倶楽部、女性、文芸春秋、法律戦線、新潮、報徳の友、戦旗、解放、文芸戦線、他
- ▼新聞——東京日日新聞、報知新聞、下野新聞、法律新聞、東京朝日新聞、他
- ▼単行本・他——横浜地方裁判所震災略記、内田良平意見書、震災善後措置二関スル建言書、朝鮮労働者保護に関する意見書、他

日本知識人・文化人約二六〇名の「朝鮮人虐殺」
「関東大震災」に関する文章・言動を集大成!

関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料

第三集

本シリーズは、関東大震災下の朝鮮人虐殺に関する史料の集大成として、第一集では、東京・横浜の児童の生々しい朝鮮人虐殺の直接・間接の証言集を収めた。第二集では、関東大震災における「朝鮮人問題」に対し、政府、陸・海軍、警察、各府県がどのように対応したかを、史料の上から立体的に分かるように編纂した。今回の第三集では、朝鮮人虐殺に対する政治家・知識人など日本人の見方の特集する。そして第四集では、震災が朝鮮に与えた影響と総督府の対策、朝鮮の新聞の震災報道を収め、第五集では、日本の新聞にみられる朝鮮人虐殺記事・流言蜚語等を網羅する予定である。

収録した知識人・文化人は総三六〇名、総件数三三三件！

朝鮮人虐殺に関する知識人の反応

〔全2巻〕

琴秉洞編・解説

体裁 B5判上製クロス装

定価 揃四一、二〇〇円

ISBN4-89774-228-5 C3021 P41200E

〔関東大震災朝鮮人虐殺問題関係史料 全五集の構成〕

第一集 朝鮮人虐殺関連児童証言史料 一九、五七〇円（現在品切れです）

第二集 朝鮮人虐殺関連官庁史料 一九、五七〇円

第三集 朝鮮人虐殺に関する知識人の反応 全2巻 四一、二〇〇円

第四集 ※朝鮮における震災関係史料

第五集 ※朝鮮人虐殺関連新聞報道史料

※印は未刊です

※なお、第四集は96年8月刊です。引き続きご予約をお願い申し上げます。

緑蔭書房

東京都板橋区板橋1-13-1 ☎03(3579)5444

表示価格はすべて消費税込みです

特約店